ＮＰＯ法人頴娃おこそ会

地域総力戦による観光まちおこし　～観光通過点から観光地への歩み～

活動に至る経緯

南九州市頴娃町は観光地として知られる指宿温泉と武家屋敷・知覧に隣接するものの、数年前までは来訪者はほとんどなく、単なる観光通過点に過ぎなかった。町内の番所鼻公園から望む東シナ海と開聞岳の景観は、江戸時代に徒歩による地図作成の折に立ち寄った伊能忠敬が「天下の絶景」と称賛したとされるが、この景勝も地元にとってはごく日常の風景に過ぎず、観光誘致に活かすには至らなかった。
2007 年末の知覧・川辺・頴娃の３町合併による南九州市誕生と時をほぼ同じくして、埼玉県からの移住者が番所鼻公園内に日本唯一のタツノオトシゴ養殖場を開設、また同じ頃公園より車で５分の釜蓋神社では地元の取組により復活した釜の蓋を頭に乗せてのユニークな“釜蓋願掛け“が注目を集め始めた。ごく普通に存在していた公園と神社における観光地への歩みの始まりであった。
進行する人口減少・少子高齢化への危機感から、地元には“頴娃おこそ会”というまちおこし活動に取り組むＮＰＯ団体が存在した。番所鼻公園で老舗旅館を営むこの NPO の理事長・西村正幸氏は、頴娃観光協会の会長でもあり、養殖場の家主でもあったことから、ここにおこそ会を中核とした番所・釜蓋起点の観光まちおこし活動が始まった。おこそ会は「地域総力戦によるまちおこし」活動を提唱、観光と農業、商工、自治会、及び行政などの各組織が良く連携し、頴娃が薩摩半島の新たな観光地として認知されるに至った。
当地の活動はまだ道半ばであるが、さらなる収益機会や雇用確保にも結び付けることを目標に地域全体への波及を目指し活動を続ける。

これまでの活動内容

2007～2009 年

- 2007 年、まちおこしに取り組む“頴娃おこそ会”がさらなる活動強化を目指しNPO に改組
- 2008 年、元海洋資源調査会社勤務の埼玉出身・加藤紳氏が番所鼻公園内の閉鎖されたレストラン跡を借り日本で唯一のタツノオトシゴ専業養殖場を開設
- 2008～09 年、番所鼻公園から車で５分の釜蓋神社では、ユニークな願掛けが評判となり認知が広がる

2010 年

- ２月、番所鼻公園の景観に魅せられた加藤紳の兄・潤が弟の事業に合流。これを機に観光養殖場“タツノオトシゴハウス”をオープンさせ観光事業に参入。しかしながら観光地でない頴娃で観光業を成立させるには頴娃が観光地になることが必要と痛感、おこそ会と連携しての観光まちおこし活動の展開を開始した
- ４月、タツノオトシゴを観光誘致に結び付けようと、おこそ会と観光協会が“竜のおとし子～吉鐘～”を東シナ海の絶景を望む番所鼻公園内の高台に建立。予算制約もありデザイン、資材調達、製作、設置などは全ておこそ会メンバーが担った。これが公園の新たなシンボルとなる
- パワースポットがブームとなる中、近隣の釜蓋神社がパワースポットとして評判を呼び、来訪者が増加
- これを受け、釜蓋神社と番所鼻公園・吉鐘の連携による周知・集客向上をめざし、両スポットを紹介した“頴娃パワースポットマップ”をおこそ会が作成、配布した
- このマップを見た南日本新聞（鹿児島随一の地方紙）が 10 月にパワースポット特集との全面特集記事の中で釜蓋神社と吉鐘を大きく掲載。県内での認知が一気に進んだ
- 公園での観光誘致活動が評価され、鹿児島県の魅力ある観光地づくり事業に番所鼻公園再整備が採択。展望広場や遊歩道整備が決定した
- 南九州市が策定したマリンゾーン基本計画において、番所鼻・釜蓋にぎわい創出プロジェクトが採択され、両地区への行政の支援が鮮明となった。
-

*番所鼻公園 Before After

イベント開催の様子

2011 年

- ３月、番所鼻公園整備事業完工。展望広場の完成で明るく開放的となり公園のムードが一新。園内スポットの名称決定や、案内看板の図案、説明文作成等は全ておこそ会が手掛けるなど、地元主体の整備が実現
- 改装効果により公園来訪者は倍増。九州新幹線の全線開通や指宿への来訪者増も奏功
- 釜蓋神社も来訪者が大幅に増加。しかしながら駐車場、トイレ、案内看板の整備など観光インフラの未整備による諸問題が発生したことから、おこそ会の声掛けにより神社所在地の自治会、商工会や観光協会員をメンバーとする“釜蓋まちおこし会”を発足、観光誘致に伴う課題協議の場とした
- 会主体にて 7 月より釜蓋日曜朝市を開催。地域住民や商店主へ、来訪者との直接交流と販売機会の提供の場となった
- 旅行代理店による知覧・指宿周遊ツアーに番所・釜蓋を組み入れるケースが増え始めた
- ツアー来訪によりガイド実施の要望相次ぐ。おこそ会が運営主体となり、７月に頴娃観光ボランティアガイド組織を発足。元バスガイドの地元住民から希望者が現れ、４名体制でのガイドが始動

- ９月、JTB 鹿児島支店よりの提案を受け、おこそ会との連携により、“頴娃っと！まるごと再発見”ツアーを開催。ボランティアガイドがバスに乗り込んでの真心のこもった案内は非常に好評。頴娃のみを巡る初の商業ツアーとなった
- 県外メディアへの登場増える。10 月発売の“るるぶ鹿児島”にも番所・釜蓋が掲載
- 番所鼻、釜蓋への来訪者増加を受けて、放置された景勝地であった大野岳の再整備を通じ茶業振興に繋げようと、地元若手お茶農家が茶寿会（茶寿は白寿などと並び 108 歳の祝いとされる言葉）を結成、おこそ会との連携が始まった。山頂展望台までもともと 70 段程度の階段があったことから、108 段の階段設置などを通じ、茶寿の山として観光誘致を図ることを行政に提案、これに県観光課が呼応し 108 段の茶寿階段設置を含む、大野岳再整備が決定した。
- 番所鼻おいても来訪者増加を受けて、県による二期整備実施が決まった

2012年(平成24年)4月18日　水曜日

隠れた名店、景観地…

頴娃の魅力満載

NPOが散策マップ　「観光客目線で厳選」

2012 年

- 辰年効果もあって、タツノオトシゴハウスのメディア掲載が急増。年末年始には全国紙や全国放送含め、30 回を超えるメディア登場となり、元旦１日で 700 人の来訪に繋がった
- 釜蓋にも初詣客が増加。正月 3 が日の来訪者数は 5000 人に達した
- ３月、大野岳整備整備完工。茶寿会の発案により、108 段の茶寿階段には途中に喜寿、米寿、白寿のモニュメントが設置されるなど、茶寿の山を前面に出し遊び心を持ったユニークな整備が実現した
- 番所鼻・釜蓋への来訪者を大野岳や各飲食店など町内全域に誘導したいと、おこそ会若手有志が作成した頴娃散策マップ“えい日和“が４月に完成。NPO が観光客目線で作成したマップとして評判を呼び、南日本他新聞３紙や TV、ラジオがえい日和を紹介

- GW 中にはおこそ会の企画にて、番所鼻公園での新茶振舞い＆販売を実施。大きな売上となり、その後茶寿会よる公園内への常設週末店舗設置に発展
- おこそ会と商工会青年部が連携した”絶景まつり実行委員会”が立ち上がり、第一回“ばんどころ絶景祭り”を開催。町内の店舗も出店。2,000 人が来訪するなど初回としてはまずまずの盛況となった
- 町内飲食店では、観光客を対象としたお茶にまつわるメニュー開発が始まるなど、地域グルメ創出への芽が出始めた。”茶ロッケ”、”茶プリン”、”お茶ゼリー”、”茶しゃぶしゃぶ”などが誕生
- なでしこジャパンの沢と福元が釜蓋神社に参拝していたことから、オリンピックの銀メダルは釜蓋のご利益？と民放全国ネット４局すべてが大きく取り上げ、さらに来訪増。県も釜蓋へのバス駐車場などの整備事業実施を決定

- 茶寿会も活発に活動。10/8 には 108 に掛けて大野岳やお茶畑を巡る茶寿ツアーの実施。茶畑を開放し茶摘採機試乗などユニークなメニューを組み入れた。またタ日の美くしさをアピールするため「オール頴娃's 山頂での夕日」と題したポスター作製、大晦日には大野岳でのキャンドルナイトイベントなどで、頴娃の盛り上げにも貢献
- かごしま観光人材育成塾にて、おこそ会より加藤潤が講師として登壇し頴娃の取組事例を発表
- 伊藤知事が視察で番所鼻・釜蓋神社などを巡り、おこそ会、茶寿会とも意見交換

２013年
・釜蓋神社は正月３が日で 19000 人の参拝と大きな賑わい。道路渋滞まで発生
・茶寿会とおこそ会との取組が「観光と農業の連携」事例として注目され始め、南日本、朝日、毎日など新聞掲載などの機会増加
・“えい日和”第二弾が完成。町内スポットや飲食店土産物情報が充実し、町内周遊の促進へ貢献
・県観光連盟がお茶畑を巡るツアーのＰＲ強化に動き、指宿ホテルはじめ、県観光関係者への視察ツアー実現。名付けて「グリーン・ティー・リズム」
・番所鼻～釜蓋間の海岸線に韓国のオルレを手本に（12 年末に現地視察）、“頴娃シーホーウォーク”を開設。おこそ会メンバーによる草払いや地図作成など手作りコースだったが、県事業に引き継がれコース整備が決定
・第二回目“ばんどころ絶景祭り”は 3300 人と去年を大きく上回る人出となり賑わった
・釜蓋神社にバス駐車場完成（2013 年３月）
・お茶グルメ活動は商工会青年部に引き継がれ、会員店舗が開発したお茶ラーメンを町内全域に広げるためのプロジェクトが始動
・シンガポールからの大野岳へのグリーン・ティー・リズム来訪
・県内各地より行政や団体などの視察来訪が増える
・古くは町内随一の商業地区でありながら寂れていた石垣地区がまちおこし気運に呼応。散策コース、マップ作り、看板設置、古民家再生など石垣プロジェクトが始動

「日本一のお茶」わっくわく
連泊増へ散策、体験
指宿発の周遊ツアー

2014
・元旦は大野岳にも 500 人と多くの来訪者。
・当地の観光まちおこし活動のさらなる活性化のために、２月に“番釜海岸魅力掘り起し会議”、３月に石垣商店街会議を開催。
・鹿児島県共生・協働型地域コミュニティづくり推進大会　NPO 部門　最優秀賞受賞
・釜蓋神社と番所鼻公園に県によるトイレ整備完工。

取り組みによる効果

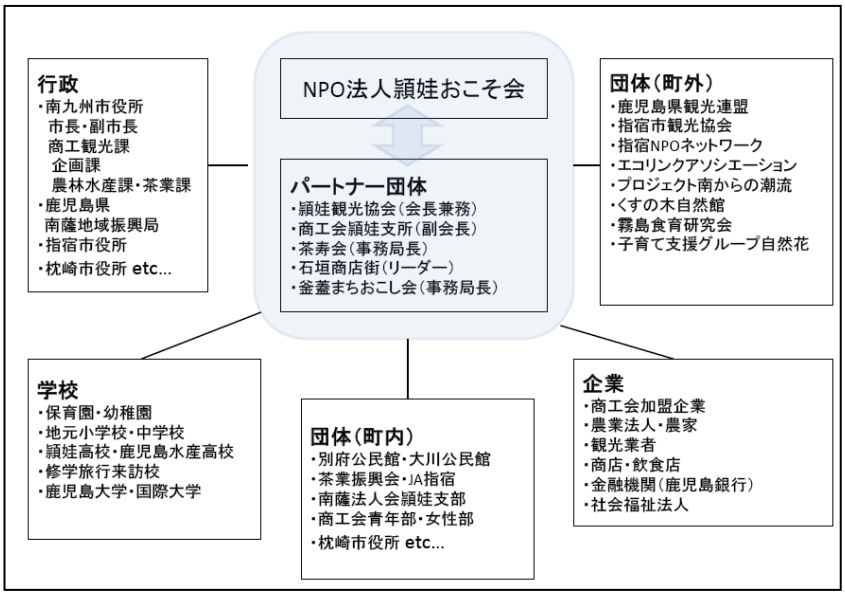
① 観光地としての認知向上と来訪者の増加
・ 番所・釜蓋は〝るるぶ〟にも掲載されるなど、観光地としての仲間入りを果たした
・ 2008 年以前は町外来訪者は非常に少なく、観光統計なし
・ 2010 年８月：釜蓋神社　10,000 人、番所鼻 5,000 人
・ 2012 年１月：釜蓋神社　25,000 人、番所鼻 11,000 人
・ 2012 年８月：釜蓋神社 30,000 人、番所鼻 10,000 人 釜蓋はなでしこジャパン参拝報道も貢献
・ 2013 年度は釜蓋神社で年間 15 万人程度の来訪と推定
② 野岳整備やお茶グルメ誕生など、観光誘致の動きが町内他地区へも広がった
③ 蓋まちおこし会、頴娃ボランティアガイド会、茶寿会、絶景祭り実行委員会、商工会青年部グルメプロジェクトなど、観光と地域、農業、商工を横断する組織が誕生するなど観光連携の輪が広まった
④ 所、釜蓋、大野岳への整備事業実現。市や県と連携してのイベントやプロジェクトなど、ハード、ソフト両面での連携事業の進展。行政と地域が役割分担を行いながらの観光まちおこし活動が展開
＊本件での行政への問い合わせ窓口
南九州市役所：観光課 塗木課長 0993-83-2511
鹿児島県南薩振興局総務部地域振興係：掛上主査 0993-52-1307

これまでの取組期間、継続期間について

活動の芽が出始めたのは 2008 年頃
本格的活動開始は 2010 年春、現在も進行中
＊詳細は時系列に記載した上記“取り組み内容”の項を参照

取組体制・組織、財源について

NPO 法人頴娃おこそ会のメンバーが中心となり、企画、立案、活動。頴娃観光協会、頴娃商工会、釜蓋まちおこし会、茶寿会、及び地元自治会、行政とも連携し推進。財源はおこそ会の自主財源（焼酎販売などのプロジェクト収益等）、観光協会資金、吉鐘賽銭、その他各団体よりの協賛金などをベースに、必要に応じ県や市の補助金制度を活用。地域では対応困難なハード事業等は行政に提案を行う



今後の展望について

頴娃おこそ会発足の理念は、人口流出・少子高齢化が進むこの地域にあって、子息や移住者が住みたいと思えるまちを創ることにある。
これまでの番所・釜蓋から始まった活動を通じて、観光誘致が進んだことは喜ばしいことだが、これを一過性のブームに終わらせず、まずは町内全域での観光まちおこしの機運の定着とさらなる交流人口の増加・安定を図ることが目下の課題となる。
交流人口増加の先にあるのは、経済効果と雇用の創出であるが、観光を通じた収益機会確保の観点では、土産物販売や飲食提供の体制も頴娃はまだまだ十分とは言えず、頴娃らしさを売りとしたグッズ開発とグルメメニューの創出、そのＰＲにさらに励んでいく必要があると考えている。

そして観光まちおこしのさらに先にあるのは、観光客が集まるまちから、住みたいと思えるまちに成長することであると考える。観光という極めて潜在力、発信力を有する産業を通じて高めた求心力を以って、外部からの頴娃への関心を高め、Ｕターン者はもちろんＩターン者にも居住地として選ばれるまちになることこそが目標となる。実際に住めるまちになるためには、雇用問題始め、課題は多く存在するが、夢と理念を持ちかつ楽しい活動を継続することで、一歩一歩着実に進んでいきたい。